

Phantom Quest SpinOff-06.

[テラタイムズ遺跡調査部の話]

「あれはさ、人事部の策略だと思うんだよね」

そうボヤいたのは大きな体をできるだけ丸めて必死に暖を取ろうとしているジャスパ・セージ。

「だよね？ 俺もそう思うんだけどさあ」

賛同したのは耳当て付きのあったかそうな帽子をちょこんとかぶったジャスパ・ゲール。いや、あざとすぎでしょ。

「最初ミスや言うてたやん (笑)」

そのコート絶対高そうだよな？ っていう超高級ブランドに身を包んだジャスパ・ノクーツが反論する。

「プーンタはどう思う？」

三人の声がユニゾンする。

「そうだなあ…」

俺、ジャスパ・プーンタはマフラーを巻き直しながら言葉を模索する。

この4人が揃うと必ずと言っていいほどあがるこのお題に答えなど出たことはないのだ。

「でもま、結果オーライってことで良かったんじゃない？」

「いつもその答えじゃん」

「ま、でもわかるよ？ 俺も結果オーライって思うもん。ノクーツもそうでしょ？」

「せやなあ」

こうやって収まるのもいつものこと。

「でもさ、あの人事部の発表の仕方はありえねえだろ？」

今日はなかなかしぶといね。セージ。

「まあなあ (笑)」

ノクーツが乗っかる。

「だってさ、『辞令 ジャスパ殿 来月1日付けで遺跡調査部へ異動』って貼り紙1枚ってさ。ある？」

「だよね？ 俺もそう思う！」

「確かにフルネームやなかったし、どの部署所属の…ってのも書いてなかったら…」

ノクーツが目の前のジャスパたちを見て笑う。

「こうなるよね？」

俺の言葉にジャスパとジャスパとジャスパは大きくなずく。

…… (笑)

× × ×

そう。俺達はテラタイムズ遺跡調査部所属の4人のジャスパ。

ある日の辞令に従って遺跡調査部に異動してみたら…こうなっていた (笑)

社会部でエースと呼ばれていたジャスパ・セージ。社会問題や環境問題などを理論立てた文章で鋭く描く彼の記事にはかなり定評があった。

文化部で多くのコーナーを任されていたジャスパ・ゲール。テラ王国内の文化向上のために色んな企画を立ち上げては紙面を盛り上げていた。

国際部で異彩を放っていたジャスパ・ノクーツ。隣国との関係性をあらゆる面でのランキング形式で比較していく彼の記事はテラタイムズ内でも人気が高かった。

そして、メディア開発部でサブチーフをやっていた俺、ジャスパ・プーンタ。多分野の開発事業の特集を組むのが俺の担当で、一番盛り上がったのはゲーム開発事業だったなあ。

そんな…経歴も性格も全く違う4人が、『遺跡調査部』という普段は地味で人気の無い部署に、あの日集まったのだ…

「…え」

4人の反応はほぼ同じだった。

「本日より遺跡調査部に配属になった、元社会部のジャスパ・セージ…なんだけど」

という言葉で全てを悟った4人。

えー。こんなことある？！

「ちょっと人事部に問い合わせしてみる」とゲールが人事部に社内電話をかける。

「俺、しっかり引き継ぎ終わってから来てんやけど…」

「…うん。俺も」

「でもさ、この中の誰か一人ってことでしょ？」

「それは、そうやろうなあ」

「…はい。…はい。いえ、ですからあ。ジャスパが4人いるんですよ」

ゲールが必死に説明をしている。

「ちょ、貸して」

と受話器を奪ったのはセージ。

「あ、お電話変わりました。元社会部のジャスパ・セージなんですけど…。え？ …いや、辞令の貼り紙にはジャスパとしか書かれてなかったから…はい。…え？」

セージの顔が固まった。

「何？」

ノクーツがのぞき込む。

セージが何を言わずに受話器をノクーツに渡す。

「…えっとお。ジャスパ・ノクーツです。…はい。…はい。…え？ そんなことありますか？」

ノクーツの顔が半分笑ってるのはなんで？

「いやいや…マジで?!」

ノクーツが困ったような笑顔で受話器を俺に渡してきた。

「…はい。ジャスパ・プーンタです。…はい」

俺は受話器を落としそうになった。

電話の向こうで人事部の一番偉いらしい人が、明るいトーンで言うてのけたのだ。

「やからあ、ジャスパ君が4人とも遺跡調査部に異動ってことで、なんの問題もないやろ？」

つまり、あの貼り紙は間違ってたわけ…。どうやら俺達は4人とも今日からここに配属らしい。

「じゃあ、よろしく頼むで(笑)」

面白いほど明るいテンションで電話は切られた。

「知ってんで。電話の相手はコアラ・ゼ・アラル。人事部のボスでこのテラタイムズでもかなりの権力者。あん人が言ってるってことは、おそらく間違いないんじゃないかな」

「いやどう考えたって、発表に不備があったことを認めたくねえから最初から4人のつもりだったって言い張ってるだけだろ」

「だよな。俺もそう思う！」

「だとしても、今そう決まったってことやろ？」

「…そうなるね。でも…」

俺の頭の中をいろんな思いがぐるぐるする。ちゃんと引き継いではきたけどメディア開発部でまだまだやりたい事はあった。もし戻れるなら…

「俺は、ここで何がやれるんやろって思ったら楽しそうやけど」

ノクーツはカラッと笑う。

「確かに。それもそうかも」

ゲールはつられたように笑った。

「やろ？」

え…？ 本当に？ そんな簡単に割り切れるもの？

戸惑う俺はセージを見た。セージはきっと…

「時間ない中必死で引き継ぎやってむちゃくちゃ大変だったからな…」

ん？

「今更戻るのも癪だし」

えっと…

「人事部のその…なんだっけ？」

「コアラ・ゼ・アラル？」

「そ。そのコアラを驚かせてやるのも一興かなって」

「どういうこと？」

俺の疑問を口にしたのはゲールだった。

「この部署ってさ、どういうイメージ？」

「え…遺跡調査部は…」

言葉を選ぼうとしているゲールにセージは「俺らしいねえんだから思ったこと言ってみろよ」とけしかけた。

「…んと…、まず地味だよな。ちょっと難しいっていう印象があるから馴染みもないし…」

「たまにクエスト記事とかおもしろかったりすることもあるけど、たまにやからなあ」

「そうなんだよね。もっとさ、コーナーとか作ってさ、有名なトレハンの特集してみるとか」

「人気のトレハンランキングとかしてもおもしろそうじゃない？」

「いいんじゃない？ あとさ、ほらコンビとかあるよね？トレハンって。なんだっけ？」

あー。なんだっけ？とセージとノクーツ。

「バディ…」

そう答えたのは俺だった。

「そう！それ。そのランキングとか面白そうな気がしない？」

「バディ組んだきっかけとかに焦点当ててみるのもいいかもな」

「エモい話とか読者好きやもんなあ」

目の前でどんどん盛り上がっていく三人。俺はそれに参加しているようで…していなくて…。

セージがにやりと笑って言う。

「もしさ、この地味な部署の記事がテラタイムズで一面を飾ったとしたら？」

「…え?!」

「下剋上やな」

「…ねえ」

自分の意志に反して、俺の口は動いた。

「何？」

三人のジャスパが俺を見る。

「あの…俺はさ…」

それ以上の言葉が続かない。

「メディア開発部だったっけ？ サブだったんだよね？ 今ちょうど勢い出てきた部署だもんな。ま。

戻るのもアリなんじゃないの？」

「……」

「この前の開発中のゲーム特集の記事、すんげえ面白かった」

「あ、俺も読んだ！今度文化部でも取り上げるようになってるよ」

「隣国への進出も視野に入れてるらしいって情報はこっちにも入ってきてるで。あの記事が火いつけたんとちゃう？」

「……うん」

俺は半歩、後ずさる。

「ってかさ、俺は社会部で日々の事案に追われてばっかだったからさ、企画とか立ち上げるような感じじゃないし、特にやり残した事とかないわけ。社会部も希望して入ったわけじゃなくそこでごかれろって放り投げられた感じだったし」

だから結構せーせーしてんだよなあって笑うセージは声は楽しそうに響いた。

「俺はさ文化部で好きなことやらせて貰えてたんだけど…、最近チーフとか任されるようになってさ、どっちかって言うと俺は現場にいたいって言うか…、上に立って色々指示出すのとか性に合わないって言うか…。だから部署異動になって1から勉強始めるのって少しワクワクしてんだよね」

うん。そのワクワク駄々洩れてるよ。

「俺はまあ、飽き性っていうか、おんなじ所にずっとおるのしんどい人やねん。いや、めっちゃ気の合う奴ら見つけたらずっと楽しめるんやろうけど、ちょっと気い張らないかん現場は長いことおるのしんどいってなるからさ。だからちょうどいい機会やなって思ったとこある（笑）」

ノクターソは至極リラックスした表情で言った。

「なんや、めっちゃ気い合いそうやし？」

…そうなんだよね。

不思議なんだけど、俺はこの空気にもう少し触れていたいと思いはじめている。

メディア開発部で張り切っていた自分が、なんだか遠い人に思える…この感覚はなんなんだろう。

「ってかさ、俺らほぼ初対面だよな？ でも、そんな感じ全然しないよね？」

ゲールがすごいこと発見したぞ！という風にはしゃいでいるけど、それ全員思ってるから。

「なんかさ…」

セージが言いかけて、俺を見る。

「面白そうなことできる気がしねえ？」

「……」

ノクーツもゲールも俺をじっと見てくる。

何だろう。偶然にも同じ名前を持ったこのメンバーの吸引力。

俺は、一歩踏み出した。

「……する！」

あーあ。言ってしまった。

…このことを後悔する日が来るかな？ いや、来たとしても…まあいいか（笑）

「じゃあさ、教えてくれへん？」

「え？」

「だってさ、ちゃんと勉強してたっぽいじゃん？ トレハンのこととか」

「…えっと…」

それはそうだった。というか俺は…

「実はさ、俺の兄貴がトレハン好きで、テラタイムズの記事の切り抜きとか集めてて…俺はその影響で昔からトレハンに興味はあったっていうか、色々教え込まれたっていうか…」

「へえ…」

入社当初の希望部署が遺跡調査部だったって言ったら言ったら笑われるかな？

「俺はテラタイムズにトレハンのことを扱ってる記事が載ってるとか全然知らなかった」

ゲールの言葉に賛同するセージ。

「あ、でもあれはよく覚えてんで。ほら、何年前やっけ。すごく騒がれたやつ」

「ああ！『大失敗のファントムクエスト！』？」

ゲールに「それぞれ！」と答えるノクーツ。

「それは俺も覚えてる。あの記事は痺れたよなあ。文章にめちゃくちゃ臨場感があってさ…」

「うん」

痺れたというセージの言葉に俺は大きくなずいた。俺にとってもあの記事は大きかった。

「なあなあ知ってる？」

ノクーツが手招きすると、他の三人は引き寄せられるように耳を傾けた。

「あれ、書いたんが…」

ノクーツはもったいぶって言い放つ—…

「コアラ・ゼ・アラールって話やで？」

× × ×

「やっぱさ、俺たちははめられたんだって」

この4人の中で一番頑固なのはこいつだと思ふ。でっかい図体のイケメン野郎。

「またその話するう？ほんま好きやな、セージ君」

「いーじゃん。盛り上がるし（笑）」

「それは、そう」

「あーもー、ってか寒いっ！！」

やっとそれを口にしたのはゲール。

「間もなくだとおもうんだけどな…」

俺は大通りへ出て目当ての人を探す。…が、まだのようだ。

ここはテラ王国の中央通りから一本外れた路地。喫煙スペースにあるドラム缶の焚火に身を寄せ合っている大の男たち。

約束の時間は5分ほど過ぎている。

「ったくよ。どのジャスパか誰も確かめなかったのかよ？」

「受付のキシリンちゃんを責めんといてやあ。がんばってるんやから」

「折り返しの番号も担当の名前も控えてないって怠慢だろうが」

「トレハン組合からってことはやっぱりルプスさんなんじゃないの？」

「そうだと思うんだけど、今クエスト同行中じゃなかったっけ？」

「確かにそうや」

「ってかどのジャスパに用があんだよ！って話だろ」

「そうだよね、でもだからってみんなで来なくても良かったんじゃない？」

ねえゲール！首をこてんとするのはあざといでしょ？

「それもそうだな。んじゃ、俺帰るわ」

「あのさ」

止めたのは俺。

「ここまで待ったんだからさ、もうちょい待ってみようよ？ だってさ、あの時みたいに俺たちの誰かじゃなくて、4人全員って可能性もあるんじゃない？」

急に前向きなこととか言ってみる。

「えー」

3人のジャスパが声を揃える。

「でも、無いとは言えないでしょ？」

…あ。みんなも思ったよね？ なんか、デジャブ。

「なんかさ、そういうこと言う奴いたよな？」

とゲール。

「わかるう」

とノクーツ。

「あれだろ？ バルト一座の看板の…」

セージの言葉に乗かって、

「[[ディアナ]]」

3人の見事なユニゾン。

「…ま、確かにここまで待ったから待つかあ」

セージは大げさなため息を一つ吐いた。割と機嫌はいいらしい。

「ジャスパさーん！」

その時知っている声が聞こえた。

遠くから手を振りながら走ってくるのは、気の知れた仲間とも言えるトレハン組合のルプス。

「やっぱりルプス君やった」

「待たせてしまってすみません！」

勢いよく頭を下げすぎてズレてしまったまあるい眼鏡をくいと上げて、ルプスは申し訳なさそうに言った。

「ついさっきクエストから帰ってきたばかりで…」

「あ、王国の遺跡調査兼ねたやつだろ？ どうだった？」

ゲールの質問にみんな前のめりになる。

「バッチリでしたよ。出発前にフィーネさんから攻略の糸口はお聞きしていましたからね、さすがです。ミラー遺跡の石の断面の謎が解ければデサスの危機が起きた時期をもっと具体的に特定できますからね」

「それははっきりしたら、歴史ん教科書が変わるかもお…？」

ノクーツが焦らすように言い、

「しれません！」

ルプスが答える。

「すげえじゃん！」

俺とセージがハイタッチ。

「…で？」

切り出したのは俺だった。

「結局どのジャスパに用があったの？」

ジャスパはきよとんとして答える。

「4人ともにですよ？」

「？」

× × ×

「まずジャスパ・セージさん。今度沈没船のクエストが組まれそうなので、向かわせる船を手配しているところなんですけど、担当者が船に詳しい人を紹介して欲しいって言われて…、ジャスパさんのことを勧めたんですよ。ほら、以前、ものすごく船のことを教えて下さったことあったじゃないですか！…で、今度会いたってことなんですけど、いかがでしょうか？」

「別にいいけど。あの…パツソソの話でしょ？」

「ジャスパ・ノクーツさん。この前テラタイムズのスタッフさんによるトレハンランキングやったじゃないですか？ …で、組合の中でそれがものすごく好評で…。できれば次はトレハン協会のスタッフによるガチランキングの企画を組んでももらえないかなあって意見があって…。検討してもらえますか？
で、その時は、それぞれのトレハンとかバディから『アピールタイム欲しい』って割とマジで言われてて（笑）…それも検討してもらえますか？」
「トレハン組合スタッフによる…はいいけど、アピールタイムは無しやな。ガチやから（笑）」

「ジャスパ・プーンタさん。トレハン組合と大手ゲーム会社がコラボして最新の体験型 RPG ゲームを開発しようって話が出てまして…。出来れば開発にあたりプーンタさんのご意見をお聞きしたいそうです。なんでもプーンタさんが特集された記事を読んで、ストーリーモードの部分にいたく感銘を受けたらしくぜひ一緒に開発を手伝ってほしいとのことなんです。忙しいとは思いますが、ご検討いただけないでしょうか？」
「あの特集はかなり力を入れていたからな」
「文字通り体を張って、大汗かいてましたもんね」
「…もう、その話はいいか？」

「ジャスパ・ゲールさん。今度、トレハンものまね大会ってのが開催されるんですけど、僕からゲールさんを推薦しておいたので、間もなく参加の通知が届くと思います。絶対ゲールさん（の可愛さ）だったら優勝間違いなしですよ！！ 頑張ってくださいね！！」
「え… え?? え??？」

× × ×

俺たちが配属になったあの日から、テラタイムズの発行部数は右肩上がり。人気記事のアンケートでも遺跡調査部はどんどん順位を上げているらしい。
「当然だろ」
「だよね？」
「ま、書いてる奴らがおもしろいからな」
「まだまだ、これから！」

テラタイムズの4人のジャスパは、
面白い記事が書きたくて、今日も奮闘中一…。

ミスだと思われた辞令がハッピーエンドに繋がるって可能性って、あると思わない？

SpinOff- 06. fin.